

平成30年度第1回富山県環境審議会 議事録（概要）

1 富山県環境審議会の組織・運営等について

・会長の選出

石塚委員が遠藤委員を会長に推挙し、異議なく選出された。

・副会長の選出

遠藤会長が湯浅委員を第1順位副会長に、楠井委員を第2順位副会長に推挙し、異議なく選出された。

・各専門部会に所属する委員等及び専門部会長の指名

遠藤会長が7つの専門部会に属する委員等と専門部会長を指名した。

2 温泉掘削等の許可について（報告）

【質疑応答なし】

3 富山県の環境行政の概要について（報告）

【全体質疑】

（委員）

現在実施中の「ロスゼロウィーク県民チャレンジ」について、とても良い取り組みだと思う。子どもたちも参加しやすいように夏休みに実施したのだと思うが、正直なところ、私はこの事業を知らなかった。どのように広報していたのか。

（事務局）

市町村にチラシを配布すると共に、県広報、HP及びフリーペーパーを通じて事業の周知を行った。

（委員）

せっかくの夏休みなので、学校を通じて広報を行うとより良かったと思う。

（会長）

現場での反応はどうか。

（事務局）

小学校4年生を対象に環境教育を行う「チャレンジ10」でも食品ロスについての取り組みを紹介し、「ロスゼロウィーク県民チャレンジ」にもご参加いただいている。また、県内の大規模な事業者にも周知しており、グループ単位で参加いただけると伺っている。

（委員）

コンビニと連携したマイバッグ運動について、男性がマイバッグを持ってコンビニに買い物に行く姿があまり想像できない。

（事務局）

今回作成したマイバッグは、使用しない時は折りたたんで小さな袋にしまうこ

とができる。また、その袋にはストラップがついており、男性でも普段からカバンやベルトにつけて持ち運べるようになっている。是非男性にも積極的にご利用いただき、ついレジ袋をもらってしまいがちなコンビニでのレジ袋の使用削減に貢献したい。

(委員)

「3015運動」について、立山の標高に由来するものだと思うが、高岡では「3010運動」として毎月30日と10日に冷蔵庫の食材を使いきろうというものが提唱されている。「3015運動」と「3010運動」が混在しており紛らわしい。どちらかに統一できないか。

(事務局)

「3010運動」は他県から始まったものだが、その取組みを富山県でも行っていくにあたって、立山の標高にちなんで「3015運動」と称して宴会の最初の30分、最後の15分は席に座って料理を食べきろうという取組みを進めている。「3015運動」と「3010運動」を統一することは難しいと感じており、富山県では「3015運動」を推進していきたい。県内飲食店の協力のもと、宴会会場のテーブルの上にポップを設置するなどしている。今後も、農林水産部と連携して「3015運動」を推進してまいりたい。

(事務局)

他県で始まった「3010運動」は、宴会の最初の30分、最後の10分は席に座って料理を食べ、食べ残しを減らそうというものであった。富山県でもその取組みをどのように行っていくかを協議したところ、どうせなら宴会の最後5分長く席についていただこうと、立山の標高にもちなんで、富山県独自の「3015運動」を推進することとした。また、その時に初めて冷蔵庫の食材の在庫を毎月30日と15日にチェックし、使いきるようにしてはどうかという考えが生まれた。30日と15日だとちょうど月の半分半分になり、バランスが良い。「3015」の方が宴会も冷蔵庫も両方の面で優れており、「3015」で進めていこうということにした。

(会長)

宴会での食べきりの運動と、冷蔵庫の食材の使いきりの運動は別のものなのか。

(事務局)

いずれも「3015運動」であり、その中で、「食べきり3015」として宴会での食べきり運動を、「使いきり3015」として冷蔵庫の食材の使いきり運動を推進している。

(委員)

これからは「3015運動」に取り組んでいきたい。

(委員)

平成29年度の現状として説明があった「人と自然との関係が希薄化」とは、具体的にどのようなことか。また、平成30年度に「ジュニアナチュラルリスト養成コ

ース」を実施するとのことだが、これは平成29年度の「人と自然との関係が希薄化」を受けて若い世代に自然環境保全の意識を身につけてもらおうということか。
(事務局)

「人と自然との関係が希薄化」というのは、生物多様性の保全の普及啓発に関する視点である。「ジュニアナチュラリスト養成コース」というのは、小学4年生から中学3年生までの子どもを対象に、青少年期からの自然保護に関する知識の向上を図ることを目的に養成講座を行うもので、平成30年度は2年ぶりに開催する。

(委員)

「人と自然との関係が希薄化」という平成29年度の実態を受け、平成30年度では「自然保護思想の普及啓発」や「自然とのふれあい創出」に取り組むこととし、更には若い世代を対象にしたのかと思ったため、質問した。

(会長)

ごもっともな指摘だと思う。

(事務局)

今後、平成30年度の施策を整理する際には、誤解のないようにしたい。

(委員)

先週、自然解説のボランティアで室堂に行ってきたが、その中で見聞きしたことについて3点述べたい。まず1点目に、室堂平で三脚の脚をロープの内側に入れて撮影している観光客がいた。脚をロープから出すように伝えたところ、話し方から富山県民であることが分かった。自然との触れ合い方のマナーを広めなければならないと感じた。2点目に、滋賀県からのグループを案内していたところ、滋賀県ではニホンジカが毒のない植物を食べつくしてしまったと聞いた。富山県ではそういったことが起こらないよう、ニホンジカやイノシシの管理を進めていただきたい。3点目に、イタドリなどの外来植物が満開に咲いているのを心を痛める思いで眺めていた。立山には海外からの観光客もたくさん来るので、自然保護のためにも、外来植物の除去にも力を入れていただきたい。

(事務局)

1点目について、今後ともナチュラリストの皆さまのご協力をいただきながら、自然観察のマナーの普及啓発に努めてまいりたい。2点目について、立山へのニホンジカの侵入状況は現在初期段階であり、高山帯への侵入を確認している。監視カメラを設置したり、ニホンジカやイノシシも指定されている指定管理鳥獣の捕獲専門チームを今年度新設し、管理に努めている。3点目について、外来種の生息は在来種の生息地を奪ったり、近縁在来種との交雑種が在来種を絶滅に追い込むなどの問題がある。一昨日、県民のボランティアご参加のもと弥陀ヶ原で外来植物の除去活動を行ったが、今後もナチュラリストの皆さまにご指導いただきながら活動を進めてまいりたい。

(委員)

「人と自然との関係が希薄化」について、人と自然との触れ合いということだけでなく、生業として人が自然を利用することが減っており、何らかの影響が生じていると認識している。例えば、林業の衰退により森の管理が不十分になり森林が荒れていたり、狩猟者の減少や高齢化により鳥獣の生息数の管理が課題になっている。

(会長)

薬師岳のライチョウの生息数調査の話があったが、その結果から立山の環境を見直すことも考えているのか。

(委員)

主だった山岳地でのライチョウの生息数調査は約40年前にはじまり、最初に立山、次は朝日岳、そして薬師岳でも調査がはじまった。薬師岳では近年少なくとも10年に1度は調査が行われている。皆さまざま存知のとおり、近年壊滅的に植生が変わったり、天敵が増えたりしているが、県や関係者の努力により、県内及び立山のライチョウの生息数は一昔前とほぼ変わらない。一番最初の立山での調査結果は267羽であり、それから40数年経つが、平成28年度の調査結果は295羽と少し増えているくらいである。一方で、一番怖いのはライチョウの性比が崩れることである。例えば立山の浄土山の場合、メスの数が1に対してオスの数が1.4である。これは正常な値であるが、県外の山岳ではメスがオスに対して非常に少なくなっている。これは、ライチョウは地上で営巣するため、キツネやテン、オコジョ、カラスなどの天敵にメスが捕食されているからである。今のところ富山県では正常な性比を保っているが、性比の調査結果は、その山岳がライチョウにとって安全な生息地かの目安にもなる。薬師岳については、平成30年度で4回目の調査となる。また、現在上野動物園や富山市ファミリーパークでライチョウの人工孵化の試みが行われている。これは大事な取り組みだが、人工飼育下で育ったライチョウが野生で生活するのは困難だと思う。なぜなら、人工飼育下では天敵対策を学ぶことが大変困難だからだ。道のりは長いと思うが、人工孵化や生育に加えて天敵対策の学習にも取り組んでほしい。

(委員)

富山県の大気環境について述べたい。近年、大気環境は徐々に良好になってきている。現在の大気環境は、発生源がピンポイントというよりも、様々な発生源からの少量ずつの汚染物質が混ざり合っている状態である。これまでは、汚染物質の発生源がある程度推測できたうえで大気環境のモニタリングを行っていたが、今後は発生源を特定するというよりも、どの地点でモニタリングを行えば富山県全体の大気環境の代表性を確保できるか考慮が必要である。また、汚染物質の濃度は低くなってきており、モニタリングの仕方を考えていく必要がある。

(委員)

コンビニと連携したマイバッグ運動について意見を述べたい。先ほど男性がマイバッグ運動に参加するのは難しいのではないか、という意見があったが、10年前のマイバッグ運動でも、家庭の中の主婦を中心に、買い物にはマイバッグを持っていこうと声が上がったと思う。今回もそのように声かけをしてもらったり、学生など若い世代にマイバッグを配布するなどして、マイバッグ運動に取り組んでもらいたい。